

期待と危険

～最近の脳科学ばやりに思うこと～

研究開発部 矢口みどり

一般庶民の生活の中に「脳科学」を謳うものがあふれ出してきた。脳年齢の診断や脳のトレーニングをするためのゲーム機、脳の機能とその維持のしかたの解説本、脳科学者が司会をするトーク番組、脳科学で難事件をつぎつぎと解決する探偵ドラマまで登場した。能力開発工学センターでは40年前から人間の行動を脳の働きから捉え教育を考えるとという研究を細々ながら続けてきたが、このように脳が注目されるようになったかと思うと、感慨深いものがある。しかし同時に大変気になることがある。

最近、世の親たちの関心を集めている脳科学に基づく子どもの教育理論・方法がある。一人でしっかり計画的に学習を進めていかれる子に育てるには、その働きをつかさどる脳の前頭前野を鍛える必要があるので、「いないいないばあ」などの予測行動を含む遊びをさせるなど、テレビや新聞でたびたび紹介される脳の機能に基づいたさまざまな刺激の与え方行動のさせ方を見ていると、なるほどと感心させられる。

問題は、その教育の目標である。この教育法の提唱者は「私の育てた子どもたちは、皆一流大学へ行っている。東大、京大、慶応、早稲田・・・くだらない大学に行ったものは一人もいない」と自慢する。脳科学を土台にした学習方法を謳うものがこの他にもあるが、そのほとんどの教育の目標が「よい成績」「受験突破」「一流大学へ行く」というところにある。そのための効率的な人間育成方法なのである。

脳がさまざまな能力を獲得する条件を整えて、計画的に学習させていくと、その条件にあったものは確かに育つ。育てようとするものが育っていく。しかし、それだけに、広い視野からの育てるべき人間像を持っていないと、偏った人間をつくってしまう危険性がある。

これからの時代、人間を育てる目標が「一流大学に行く」であってよいのか。一流大学に行くための能力は、人間の能力としては部分的なものである。一流大学を出たからといって、その人が一流の人であるというわけではない。国民の汗の結晶である税金を、自分の余生の安寧のために使ってしまった高級天下り官僚たちは、いずれも一流大学の出身者ではなかったか。むしろ、一流大学に行くための勉強のために、大事なものを育てそくなったのではないかとさえ思われるのである。

忘れてはならないのは、教育は、育てるべき人間の全体像をしっかり持って設計し、実施しなければならないということだ。育てるべき人間の目標としておくのは、「一流大学へ行く」ではなく、「社会の中で働く人間」「社会の課題をとらえ解決する力の育成」ではないだろうか。働く場、生きていく場における状況を分析し課題を見出し、協力し合い助け合って行動する力、人の痛み苦しみに共感する力、隣人や弱者に優しく対応する力、自然の豊かさ素晴らしさを感じ取る力・・・、それらはどういう環境の中でどういう行動を通じて育っていくのか。地球的視野をもちながら目の現実の中で着実に行動していく、そんな21世紀を築いていくための人間育成のために、脳科学を使うことを考えていきたいものである。

JADEC ニュース 78号 (2009/9) より